

Mail Magazine

Vol.1

画像史料から読み解く紡績業史

甲南大学ビジネス・イノベーション研究所兼任研究員（甲南大学 経営学部 教授）平野 恭平

私は、従来の日本経済史・経営史研究では十分に活用されていなかった写真をはじめとする画像史料を用いて、明治期から大正期にかけての紡績企業の経営、特に労務管理や労働者募集、農村社会とのコミュニケーションといったことを明らかにしようと試みています。新聞・雑誌・ラジオ・テレビなど、様々なメディアが日本社会に与えてきた影響については、すでに多くの歴史研究がありますが、経済史・経営史分野ではまだ限られています。歴史研究での写真については、イメージの形成に結び付く挿絵的な利用や、文字史料の補完的な利用が多かったのですが、写真やそれらを用いた発行物などを研究の対象として、その社会的機能に迫ろうとするアプローチも重要性を増しています。私も、紡績企業が発行した写真帳・募集案内・絵葉書などを通じて企業経営の中での視覚メディアのもつ役割や機能を明らかにしようとしています。

現在、私は、紡績企業が発行していた絵葉書を取り上げ、紡績企業の情報発信、紡績工場と農村社会とのコミュニケーションなどに果たす写真のもつ役割や機能を明らかにしようとしています。ゼミ活動の一環として、ゼミの学生たち（山口ほのかさん、清水萌杏さん、岡野美月さん）にも史料整理を手伝ってもらい、数百枚の紡績絵葉書を研究に利用できるようになりました。明治後期に紡績企業が情報発信やコミュニケーションに力を入れるようになった背景には、労働者募集の激化と一部の募集人による詐欺的な募集の横行があり、その根底には紡績工場と農村社会との間での雇用をめぐる情報の非対称性という問題がありました。それを克服する1つの手段として、私が中心的に取り上げている鐘淵紡績では、情報発信を活発化するとともに、新しいメディアである写真に着目し、様々な形で利用していきました。この鐘淵紡績は、まだ労働者が酷使されることが多い中で、労働者の優遇政策を他社に先駆けて進めていました。そのことは、すでに文字史料に基づいて明らかにされていますが、その優遇策をどのように発信・伝達し、この情報の問題を克服しようとしたのかということは等閑視されてきました。私は、この点について、絵葉書をはじめとする写真を用いた発行物から明らかにしようとして取り組んでいますが、それは、過去の経営問題を解き明かすだけでなく、現在の雇用をめぐる情報発信のあり方にとっても示唆に富んだ知見を得ることにつながるかもしれません。

写真をはじめとする画像史料を取り上げることによって、新しい論点の提起や新しい事実の発見などが可能になり、文字史料をベースに描かれてきた従来の紡績業史のアップデートにつながることを期待しています。画像史料を取り上げるからこそ読み取れることを探求し、日本経済史・経営史にとどまらず広く歴史研究に通じる知見を得ることを目指しています。

